

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者を支援するあなたのための情報紙です。



宮理グリーンベルトプロジェクトが開催した「自分たちの森づくり」ワークショップ

特集

## 次の暮らしを考える

### 特集◎次の暮らしを考える

- おらほのまちをみんなでつくる  
わたりグリーンベルトプロジェクト  
(宮城県亶理町) ③
- まじわる2つのまち  
コンテナおおあみ (宮城県登米市) ⑤
- 店主たちが描く陸前高田市の未来  
陸前高田未来商店街 (岩手県陸前高田市) ⑦

☆専門家に聞く地域づくりのヒント

#### 生きがい仕事④

ボランティアのためのボランティアの宿  
宮城県気仙沼市 ボラやど若芽 (宮城県気仙沼市) ⑨

まちの仕組み③ 支援の始まりはちょっとした気づきから  
(福島県新地町) ⑩

#### 事例をとおして考えよう! ⑫

専門家が話す☆支援のツボ

#### 全国に避難する被災者への支援②

地元ぐるみで組織的に被災者の暮らしを支える (大阪府豊中市) ⑭

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

#### 東北の元気④

大和田信さん (福島県会津美里町) ⑯

- ・読者の声
- ・購読者を募集しています!
- ・次号予告
- ・編集後記

特集

# 次の暮らしを考える

自分たちの未来を自分たちでつくる

口に出してはみるものの、決して簡単ではないこと

ひとりではちょっと難しいかもしれない

けれども、みんなで手を取り合って、一歩ずつ進めば

きっと素敵な未来が見えるはず

宮城県亘理町では、住民による防潮林づくり「わたりグリーンベルトプロジェクト」が始まった  
防潮林づくりが、今、まちづくりにまで発展しようとしている

宮城県登米市では、登米市に避難してきた南三陸町の住民たちと、登米市の住民たちが  
自分たちの居場所づくりを行っている

岩手県陸前高田市にある「陸前高田未来商店街」は、店主たちが、

いつの日か全員で新店舗を構えようという夢と

地域のみんが笑顔になれる場所をつくらうという夢を実現すべく、活動している

## まちを考えること

## それは未来の暮らしを考えること





# おらほのまちをみんなでつくる

◎わたりグリーンベルトプロジェクト(宮城県亶理町)

**防潮林づくりから始まるまちづくり**

「わたりグリーンベルトプロジェクト」は、亶理町内の住民や地元の事業者、行政区長をはじめ、地元出身の大学生などで構成される「わたりグリーンベルトプロジェクト運営委員会」が主催するまちづくりプロジェクトだ。大きく分けて2つのプロジェクトで構成されている。

1つ目は、伊達政宗の時代に「つくられて以降、津波、高潮、飛砂、潮風などから住民を守ってきた防潮林の復活を目指す活動だ。現在はそのベースとなる苗木をつくっている。4万個の苗木のポットをつくり、2014年頃からの植林を目指している。

2つ目は、おもに沿岸部のグラウンドデザインを策定する活動だ。この活動は亶理町震災復興計画事業に組み込まれている。対象エリアは防潮林やその周辺にある沿岸地域で、「みんなで作せっぺ！おらほの森」(みんなで作ろう！私たちの森)と題した全5回のワー

クシヨップが開催され、9月にはマスタープランが完成した。

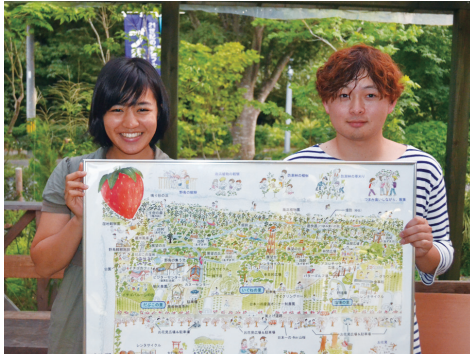
**さまざまな人が参加できるまちづくり**

9月に完成したグラウンドデザインは、5回のワークショップをとおしてつくられた。「わたりグリーンベルトプロジェクト運営委員会」のメンバーだけでなく、亶理町の住民をはじめ、周辺の市町村に暮らす人、ボランティアなど多くの人が参加し、マスタープランの策定には90人近い人がかかわった。「自分たちの身内を集めてプランをつくるのではなく、多くの人の意見を集めてプランをつくることで、一人ひとりの思い入れのある計画づくりにしたかった」とプロジェクトを仕かけた一般社団法人ふらっとーほく理事の細田幸恵さんは話す。

**みんなで作る復興まちづくり**

**復興まちづくり**

プロジェクトのテーマの一つに「みんなで作る復興



# 細田 幸恵さんと阿部 結悟さん

## 「あんだほのまちから おらほのまちへ」

「あんだほのまちづくり」が掲げられている。町の将来を担う立場であるものの、復興計画や、まちづくりに参加が難しい子どもたちも総合学習の時間を利用して、苗木づくりへの参加がすめられている。「復興のまちづくりに参加することで、地域学習や防災学習につながれば」と理事の阿部結悟さんは話す。

さまざまな立場の人たちがまちづくりに参加することで、一人ひとりに思い入れのある「わたしたちのまち」に変わっていく。

実際に、ワークショップに参加した人たちからは、「後世の人たちが、自分たちの先祖がどのような思いをもつてつくったものなのかかわかるようにしたい」「そこにかかわった一人ひとりの軌跡がわかるようにしたい」といった声が上がっている。自分たちの思いを込めた復興がグリーンベルトプロジェクトから始まっている。

第4回目のワークショップには亘理町の齋藤邦男町長も参加し、町民が自分た

ちで町の未来を決める「わたりグリーンベルトプロジェクト」への期待を語った。

グリーンベルトプロジェクトは町が作成した復興計画の具体化につながって

田さんは話す。

「大きなビジョンを描くよりも、地に足のついた計画を着実に実行していきたい」「時間をかけてでも持続可能な復興を行っていききたい」と阿部さん。



マスタープランイメージ図 わたりグリーンプロジェクト

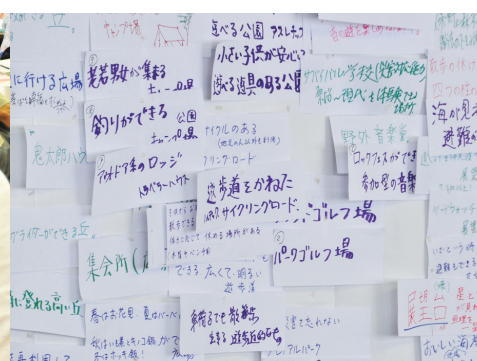
「この木は私が若い頃に植えた木なんだよ。そんな会話がここから生まれたらいい」と阿部さんは話す。

一人ひとりがまちづくりに参加することで、それぞれ思い入れのあるまちになる。

住民のまちづくりへの参画は「あんだほのまち（あなだのまち）」から「おらほのまち（わたしのまち）」へと思いのこもったまちづくりへとつながる。



それぞれがまちへの思いを述べていきます



ワークショップをとおして集まった住民の思い



苗木づくりから始めます



子どもたちにビー玉を渡す松原忠史さん



## まじわる2つのまち

◎コンテナおおあみ (宮城県登米市)

### 2つの地域の交流

東日本大震災で被災し、宮城県登米市に避難してきた同県南三陸町の住民と登米市の住民の活動が、登米市で盛り上がりを見せている。

2012年9月には登米市と南三陸町の女性たちで「とめ女性支援センター」を設立。同年11月には、双方の住民たちが交流する場として空き家を改装した居酒屋をオープンした。登米市大網商工振興会の地域社会活動活性化事業部（コンテナおおあみ）が震災直後、避難場所となった市内の体育館で携帯電話の充電サービスを実施していたときにできたつながりが、今の登米市と南三陸町の交流の始まりとなっている。

### 避難女性の声を形に

とめ女性支援センターは、女性同士の語らいや情報交換ができる場だ。カフェスペース、相談室、託児スペースが設けられており、女性がゆっくりとくつろげる場所になっている。

開設に至ったのは、南三陸町から避難してきた女性たちからの切実な声があった。

登米市と南三陸町は隣接しているのに、まったく知らない土地ではないという人もいる。しかし、そこで暮らすとなると勝手が違う。知りたい情報がどこで得られるのかわからないという声に住民から上がった。

小さい子どもをもつお母さんたちも多く避難してきたなかで、もともと登米市にあった保育所では定員が超過してしまい、保育所に入れないという問題も出現し、働いているお母さんにとっては大きな困りごととなった。専業主婦の人たちにとっても、狭い仮設住宅



青と白の外観が印象的なコンテナおおあみ



## ラララクラブ 牧野 直子さん

「登米市の人、南三陸町の人、と分けるのではなく、  
出会ったみんなが仲間。  
もっと大きな仲間の輪を広げていきたい」

のなかで小さな子どもを育てることに、落ち着かない」といった悩みがある。その現状を知った、コンテナおおあみでは、情報を一か所に集約できる場所、そして、女性とその子どもたちが、ゆったりとした気持ちで過ごせるような場所をつくる必要があると、とめ女性支援センター開設の構想が浮かんだ。その運営の中心となったのが、登米市と南三陸町の女性たちで結成した「ラララクラブ」だ。

### 女性目線の支援

コンテナおおあみが避難所での支援活動を行っていた際、避難してきた南三陸町の女性たちの活躍が目にとまった。物資の配布の際にも、てきぱきと動き、適切な対応をとっている姿を見て、女性のたくましさを実感。女性の目線を支援活動に活かせるのではないかと考え、避難所で顔見知りになった南三陸町の女性たちと登米市の女性たちを引き合わせた。ラララクラブの結成だ。メンバーは30歳代から50歳代の、登米市に

避難してきた南三陸町の女性と南三陸町在住の女性、そして登米市の女性たちを含め15人。一緒に食事をしたり、仮設住宅で名物の汁をふるまったりと、交流を楽しみむうちに、避難してきた女性が抱える不安に目を向けるようになった。2012年の年明けに全員が集まり、話し合いを実施。心配ごとがある女性たちの力になるために、「子育て」と「女性」という大きな二本の柱を打ち立て、女性支援センターの開設という目標を掲げた。ラララクラブの牧野直子さんは、「女性たちの特技を活かせるような場所にもしたいと思っています。なにか得意



漆喰塗りには大人もすすんで参加

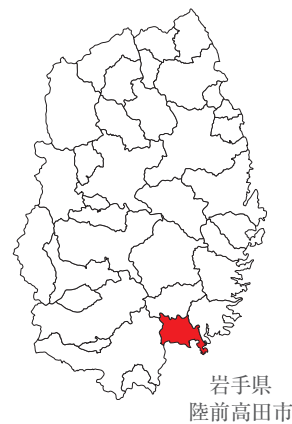
なことがある人を講師としてワークショップやセミナーのようなものを開催できれば」と、話す。住民たちの手づくり品を販売するコーナーも備えつけられており、幅広い利用ができることを感じさせる。「登米市の人、南三陸町の人、と分けるのではなく、出会ったみんなが仲間。ラララクラブがその第一歩で、とめ女性支援センターを通じて、もっと大きな仲間の輪を広げていきたい。みんなで成長して、ここに来ればなんでもわかる」と夢が実現できる」と思ってもらえるような場所にしたい」と牧野さんは熱い思いを語る。

### みんなで作る交流の場

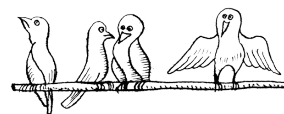
コンテナおおあみでは、登米市にある空き家を利用して、登米市と南三陸町の交流の場づくりも仕かけた。空き家の改装を行ったのはもちろん住民たち。地元の大工の協力も得て改装、住民たちの思いがぎっしり詰まった交流スペースになった。「改裝作業のと

きだけの交流や、建物が完成してから交流しようでは意味がないと思ったんです」と話すのはコンテナおおあみの松原忠史さん。夏には双方の住民が集まり盆祭りを計画、開催した。1200人も人が集まった盆祭りは、来年もまたやりたいという声も多くあり、双方の結束をさらに深めた。

昼はランチや学習支援、住民活動の場、夜は居酒屋となるこの場所には、さまざまな可能性がある。「料理が得意な人がキッチンを提供して使ってもらいたいだろうし、お母さん方に仮設住宅の狭いキッチンではつくるのが困難な手の込んだ料理をここでつくってもらって、仮設住宅に住んでいる、さまざまな理由で外に出ることが難しい人たちに安い値段で販売するなど、いろいろな使い方があると思う」と、松原さんは今後の展望を話す。双方の住民たちが築いてきた関係は、多様な可能性を含んでいる。管



岩手県  
陸前高田市



事務局の種坂奈保子さん

## 店主たちが描く陸前高田市の未来

◎陸前高田未来商店街（岩手県陸前高田市）

### 未来への旅立ちを目指す

震災以降、これまで以上に活気あるまちづくりをしようとして、奮起している商店街がたくさんある。岩手県陸前高田市の「陸前高田未来商店街」もその一つだ。

津波によって、多くの店が壊滅的な被害を受けた商店街を復活させようと、2011年9月に、10店舗1団体の店主たちが立ち上がった。陸前高田未来商店街で店舗を再建した小笠原修さんは、「震災によってたたくさんのものを失った。でも私たちには仲間がいる。今のこの苦しみをみんな乗り越えて、5年、10年後の未来に、全員でまた新たな商店街に臨むことを目指している」と、その強い思いを話す。

### 見たことのない仮設店舗をつくらう

印象的だったのは各店舗の華やかさだ。看板をくぐり抜けると、外壁に色とりどりのイラストが描かれた店舗が並ぶ。震災前からその場所に存在していたかの

### ような佇まいだ。

「見たことのない仮設店舗をつくらうよ」という話が出て、いろんな人の協力を得て、いまの形になったんです」と話すのは、陸前高田未来商店街事務局の種坂奈保子さん。無償提供を受けたコンテナハウスをそのまま使うのではもの足りない、外壁へのペイントを計画。ボランティアの呼びかけをし、賛同したイラストレーターたちがペイントを施した。多くの人たちとともに作り上げた商店街の外観からは、店主たちのやさしさや温かみが見み出ている。

### 店舗にかける思い

小笠原さんは、婦人服や化粧品を扱う「ファッションロペ東京屋」を夫婦で営んでいる。店には顔なじみのお客様だけでなく、震災前には一度遠ざかったお客様もまた足を運ぶようになった。「お客様からの、『よかったね』『前と変わらないね』という言葉が、すごくうれしかったんです」と小笠原さん。震災前後の



ファッションロペ東京屋店主の小笠原修さん



色鮮やかなお店が並ぶ



商店街には一休みスペースも

気持ちの変化を聞くと、「仕入れの際、以前より商品を選びたいという声が多くなりました。来てくれたお客様に喜ばれるように、気持ちを込めて選んでいます」。小笠原さんにはお客様一人ひとりの笑顔が浮かんでいようだ。

### 夢があふれる商店街

毎月行われる出店者会議。話のなかで共通する思いは、陸前高田をよくしたいということ。店を構えるだけでなく、地域の人たちが喜ぶ場所になりたいという願いがある。

「どんな商店街にしたいか」ワークショップを行った際、公園のような場所をつくりたいという構想が浮かんだ。今、陸前高田市に



事務局の黒田征太郎さん

は「ちよつと座っておしゃべりできる場所」がない。そのため、家から外に出ても、スーパーなどの店と自宅との往復のみになってしまおう。「座って話そうと思おうと喫茶店に入るしかない。もっと気軽に立ち寄りたり、座って話せる場所が必要だと思っんです」と種坂さん。同じく事務局の黒田征太郎さんも「買い物という機能だけでなく、ふらっと来て交流できる場所にしたい」と思いを語る。商店街には「ちよつと座ってひとやすみ」と書かれた看板が置かれた休憩スペースがあり、商店街にかかわる人たちの思いが形になっている。

全員が気持ちを通わせることが、よりよい商店街づくりやまちづくりにつながる。商店主たちがともに助け合い、再び本店舗へ向かう夢を叶えるための商店街、そして地域の人たちが笑顔になれる商店街という、二つの大きな未来を指して、いま陸前高田未来商店街は歩み始めた。言

### ！ 専門家に聞く地域づくりのヒント

## 地域づくりと職域づくりのシンクロナイズ



関西学院大学人間福祉学部社会起業学科 教授

### 牧里 毎治 (まささと・つねじ) さん

大阪府立大学社会福祉学部(教授)を経て現職。市民・住民が自ら生活問題や福祉問題を解決するための地方自治体への参加・参画など地域に根ざした福祉サービス供給のあり方を研究。日本地域福祉学会会長、関西学院大学人間福祉学部学部長、日本社会福祉学会副会長、大阪ボランティア協会理事長、宝塚NPOセンター理事長など多方面で活躍中。

復興に最も時間がかかるのは、被災者の心の復興と言われます。さらにその前提となる経済復興も目に見えるほどには進まないと言われていました。失った産業基盤が復旧しても、取引先や顧客もすべてが戻ってくるわけではないのです。

そのため被災地の復興は、雇用や就業の復活、地場産業や生活支援サービスなど、仕事づくり・職域づくりが地域づくり・まちづくりの基本といえます。仕事と職場の職域づくりと暮らしの地域づくりが重層的に重なり合い、共鳴することで働くことと暮らすことがつながり、形になります。特集で紹介された3つの取り組みは、いずれも職域づくり・地域づくりに住民の参加が欠かせないことを示しています。

#### ① わたりグリーンベルトプロジェクト

防潮林の再生を目指すグリーンベルトプロジェクトは、まさに住民参加を絵に描いたように進める復興計画への参画活動です。とかく復興計画はハードの側面を強調したトップダウンの策定に流れやすいのですが、生活者である住民の立場から子どもから大人までボトムアップに提案される計画策定の取り組みであることが重要なのです。

#### ② コンテナおおあみ

登米市へ南三陸町の住民が避難してきたことがきっかけ

だとしても、地域を越境して協働の場をつくったことはすばらしい。とかく救援、支援、復興にはジェンダー視点が欠落しやすいと指摘されていますが、それを乗り越えて現代風の井戸端会議づくりに立ち上がったことに勇氣と感動を覚えます。

#### ③ 陸前高田未来商店街

陸前高田未来商店街の取り組みは、創生という表現が似つかわしい夢のある商店街づくり・活性化プログラムです。商店街だから買い物をする空間であることに変わりはないのですが、<sup>あな</sup>商いにも心の通い合うコミュニケーションがなければ、自分たちの商店街としての愛着、誇りは生まれません。交流拠点として、癒しの居場所として未来商店街を見つめ続けたいと思います。

復興には拠点づくり、つながりづくり、そして夢づくりが不可欠です。それを盛りつける器が計画策定だとすると、他人から押しつけられてつくる計画よりも住民の手づくりの復興計画、住民主体のまちづくりプランがいかに重要であるかわかってもらえるでしょう。今すぐに解決できない課題も、夢と希望をもって語り合うことが、次の時代の被災地に生きる若者たち、未来の子どもたちへのかけがいのない贈り物になるのです。





宮城県  
気仙沼市

# ボランティアのための ボランティアの宿

宮城県気仙沼市 ボラやど若芽<sup>わかめ</sup>

「泊まるところがほしいな」。ボランティアのその一言が始まりだった。宮城県気仙沼市にある「ボラやど若芽」。漁師だった熊谷敬三<sup>くまがい</sup>さんが、震災支援に訪れるボランティアの宿泊場所にと、自宅を「宿」にした。東日本大震災の津波で大きな被害を受けた気仙沼市には、たくさんのボランティアが訪れるものの、寝泊りできるホテルや旅館は少なく、寝袋を持参するボランティアも多かった。熊谷さんに宿の話をしたボランティアもその一人。「ひとり暮らしだし、部屋も空いているからいいよって言ったんだ。あんまり深くは考えなかったな」と熊

谷さん。熊谷さんの自宅も一階は浸水したものの、ご自身で部屋を改装。布団やシーツは真空パックで保管していたため、宿を開くのに不足しているものはなかった。宿は1泊2千円。台所を自由に使うことができ、最大14人の宿泊が可能だ。あまりの安さに驚くと、さらにびっくりすることが。熊谷さんは宿泊代の2千円から光熱費を除いたすべての額を、気仙沼市のボランティア協会に寄付しているのだ。「ボランティアさんたちは、自分たちのために無料で来てくれてる。ただじゃ遠慮されるから2千円にしているけど、本当はもらわなくてもいいんだ」

と熊谷さんは話す。夕方、活動から帰ってきたボランティアたちが「今日なに食べる?」「私これ買ってくるから」とみんなで話し、調理をして食卓を囲む。「学生時代の合宿みたいなんだよね」と、ボランティアの福井恵子さんと熊谷さんも「みんなで一緒にわいわい食べて話して。とにかく楽しいんだ」と、うれしそうだ。「お父さん、お父さんって呼んでたんだけど、あるとき年齢を聞いたら私より年下なんだもん!これからは旦那さんって呼んだらいいのかしら」と、笑いながら2人が話す様子から、ボラやど若芽が、単に泊まるだけの「宿」ではないことがうかがえる。

宿と同時に「子ども文庫」も始めた。これも「子どもたちが本を読める場所がほしい」という声がかきつけられたもので、100冊以上も置いてある。熊谷さんがテレビを見ていると隣に座って本を読んだり、寝転がって読む子もいたり、子どもたちにとっても居心地の良い場所になっている。「利用する人がいるうちには続けていく。残してもらった家だから」と熊谷さん。ボラやど若芽はまさにボランティアのためのボランティアの宿だった。言



熊谷敬三さん(右)と宿泊に来ていた福井恵子さん



玄関には「ボラやど若芽」の看板が



自宅の一室にある子ども文庫



ボラやど若芽<sup>わかめ</sup>

〒988-0043  
宮城県気仙沼市南郷11-7  
TEL/FAX:0226-23-2948



まちの仕組み

福島県新地町

3

# 支援の始まりはちよつとした気づきから

## 福島県新地町

### 自分たちで考える

「新地町はもともと住民の結束が強い地域。私たちがなにか言う前に、それぞれが自分たちでどうするか考えて、行動しているんです」と話すのは、福島県新地町の健康福祉課長の富田いさ子さん。東日本大震災の津波により、新地町では死者、行方不明者が合わせて116人に及んだ。500戸を超える住宅が全半壊し、JR常磐線新地駅も全壊。復旧のめどは立っていない。現在、町内に建てられた8か所の仮設住宅には、原発近隣地域など、町外からの避難者も含め、548世帯1423人が暮らしている。

新地町で被災者支援にあたっては、福島県から派遣された保健師と看護師で構成された絆支援員、新地町社会福祉協議会が運営しているサポートセンター（サポートセンターまごころ）に常駐する生活支援相談員と地域交流サロン支援員、民生・児童委員、地域包括支援センターや在宅介護支援センター、保健センターなどの各種専門職だ。月に1回、会議を開き、それぞれが経験した事例を話しながら情報共有を行っている。訪問活動やサロンの運営を担っているサポートセンターまごころのスタッフに活動の様子を伺うと、自分たちでどうするべきか考えて、行動している」といふ富田さんの言葉どおりの活動がそこにある。

### 幸せの色を身に付けた

支援員

サポートセンターまごころで目を引くのは、生活支援相談員が皆、淡い黄色の

服を着ていることだ。

訪問活動、配食サービス、サロン活動、デイサービスを行っているサポートセンターまごころのスタッフのなかで、訪問活動を行っている生活支援相談員だけが黄色の服を着ていることには理由があった。

震災直後、ボランティアも含め、多くの団体が支援活動のために町にやってきた。「今は住民のみなさんが私たちの名前を覚えてくださっているけど、その頃はあまりにたくさんの方が来ているから、誰が自分に直接関係のある人なのかを把握するのは難しかったと思うんです」と話すのは生活支援相談員の目黒静子さん。住民たちは支援員の名前を覚えることはもとより、支援員の顔を覚えるのも困難だった。そんなとき、支援物資として届いた色とりどりのTシャツのな

かの淡い黄色が目にとまった。「今思うと、震災直後に来ていたボランティアさんたちに黄色い服を着た人はいなかったような気がする。青系の色だったり、グレーが多かったんじゃないかな」と、生活支援相談員の菅野一子さんは当時を振り返る。顔は覚えられなくとも、パッと見た瞬間に生活支援相談員だとわかるように、黄色の服を着ようと決めた。その効果はてきめんで、「黄色い服＝相談でき

る人」という認識が、住民たちの間で広まっていった。住民の一人からは「黄色は幸せの色だから、とってほしいね」という声も聞かれている。生活支援相談員の伊藤信子さんは、「黄色の服で、相談員さんだ」と安心してもらえている。住民の皆さんとのかかわりももっと密にしていって、なんでも話してもらえ



サロン担当の児島仁子さん（左）と門馬純子さん



サロンでつくった作品



福島県  
新地町



上) 新地町健康福祉課の富田いさ子さん(左)と佐藤茂文さん  
下)「サポートセンターまごころ」

左から) 生活支援相談員の伊藤信子さん、菅野一子さん、目黒静子さん

うな信頼関係を築いていき  
たい」と抱負を語った。

### 二度楽しめるサロン

もう一つ印象的なのはサ  
ロン活動だ。仮設住宅の集  
会所だけでなく、借り上げ  
住宅と在宅被災者を対象と  
した活動も行っている。サ  
ロン活動を担当するのは、

門馬純子さんと小島仁子さ  
ん。2011年10月に民生・  
児童委員の運営で開始され  
たサロン活動は、2012  
年4月からサポートセン  
ターで行うことになった。

もともとは仮設住宅のみを  
対象として、一つの仮設住  
宅につき月2回行っていた  
サロン活動。しかし、生活  
支援相談員からの一言が状  
況を変えた。「借り上げ住  
宅と在宅被災者たちには、  
支援の手が少ないという話  
を聞いたんです」と門馬さ  
ん。

なんとかできないかと、  
2012年6月から17世帯  
がまとまって入居している  
借り上げ住宅でサロン活動  
を開始。続いて同年7月に  
在宅被災者の多い大戸浜地  
区での活動を始めた。手芸

を楽しむサロン活動は、参  
加者から「楽しい」「出か  
ける場所ができてよかつ  
た」という声が聞かれてい  
る。大戸浜地区のサロン活  
動には、30歳代から80歳代  
までという、幅広い世代が  
参加。サロン活動がなけれ  
ば接点がなかったかもしれ  
ない人たちが出会い、交流  
する場になっている。

「サロンが終わってから  
の、お茶やお菓子を食べな  
がらお話を楽しむ時間が長  
いんです。そっちのほうが  
サロンみたい」と笑いな  
がら話す小島さん。10時  
から11時半までと時間は決めて  
いるものの、それ以上に  
ゆっくりしていくことが多  
いそう。住民たちにとつ  
て、手芸を楽しむことはも  
ちろん、隣近所の人と交流  
する、二度楽しめるサロン  
になっていることを感じた。

### 気づきが関係性を変える

そのほかにも、サポート  
センターまごころは、町外  
からの避難者が暮らす仮設  
住宅と、あるボランティア  
団体を結びつけた。新地町  
の行政区ごとに入居する仮

設住宅と違い、さまざまな  
地域から入居した仮設住宅  
では、お母さん同士のつな  
がり薄いことが気にか  
かっていた。そこで、子ど  
も向けのイベントを行って  
いるボランティア団体にそ  
の仮設住宅を紹介。イベン  
トをとおして、お母さん同  
士が仲良くなれる場になる  
ことを目指した。ボラン

ティアがイベントを行うよ  
うになってから、希薄だっ  
たお母さん同士のつながり  
が、またたく間に深まった。  
髪を束ねるシユシユづくり  
を行ったときには、「こん  
なに若いお母さんたちがい  
たの?」と思うほど、多く  
の人が参加し、大盛況だっ  
た。ちょっとした気づきと  
行動が、住民同士の関係性  
を変えたのだ。

支援員自身がどうするべ  
きか考えて、行動する。住  
民のこと、新地町のこれか  
らを日々一生懸命考え、真  
摯に向き合っているからこ  
そ、その行動はよい結果へ  
とつながっている。新地町  
の支援員たちは、今日も誰  
かのことを思いながら、活  
躍している。菅

# 事例をとおして考えよう！

宮城県内の被災市町では、被災者の生活を支援するために、各種支援員を配置して、戸別訪問や相談事業などを行っています。支援員の多くは、震災で家や職を失った被災者であり、介護や福祉の知識・経験のない人もいます。宮城県が設置した「宮城県サポートセンター」支援事務所が関係機関と共同して、これら支援員対象の研修会を開催しています。期待される役割や個別支援と地域福祉活動の理解を深めることに重点を置いた研修では、基礎知識を学びつつ、グループワークを多用して、毎回さまざまな事例について白熱した話し合いが行われています。

このコーナーでは、毎月、実際に研修で使われている事例を紹介し、受講した支援員たちが事例に対して感じた生の声と、専門家による支援のポイントを掲載していきます。事例をとおし、あなたならどうするか、一緒に考えてみましょう。

## 今月の事例・孫の帰りを待つ認知症の花子さん

花子さんは津波で孫を亡くしました。あの日、孫は花子さんを避難所まで車で送ってくれました。そして、すぐに再びほかの家族を迎えに行くため自宅に戻って行きました。それから数分後、あの恐ろしい津波がまちを一瞬间にしてのみ込んでいきました。それ以来、花子さんは孫のひろしさんに会っていません。毎日体育館の外で待っていました。ひろしさんはとうとう再び迎えに来てはくれませんでした。

その後、花子さんは数人の近隣の人の誘いを受け、今の仮設住宅に引っ越してきましたが、訪れる家族もなく、毎日押しつぶされそうな不安のなか、夕方になると無性に元の家に孫が帰っているような気がして帰りたくありません。

しばらくして、仮設住宅で問題が起きていました。花子さんが夜中になると近隣のベルを鳴らして回り、出てきた住民に「ひろしが来てませんか」と尋ねるのです。あるときは手にライターを持っていました。花子さんが認知症になっていいることはわかっていましたが、それを見た住民はもしかすると、あのライターでどこか火をつけるのではないかと大騒ぎになりました。そして、「あのままだと危なくて仕方がない。どこか施設にでも入ってもらえないか」と見守り支援員さんに相談しました。花子さんの持っていたライターはひろしさんから預かっていたものでした。

### Profile



ながさか・みはる  
研修講師・永坂美晴

兵庫県明石市望海在宅介護支援センターセンター長  
看護師、主任介護支援専門員  
阪神・淡路大震災時に仮設住宅の支援に奔走。そこで得たノウハウを地域活動に生かすべく、地域の住民とともに「地域劇」などを開催。東日本大震災の被災地の仮設住宅にはケアマネジャーとしても定期的に訪れている。



### 今回のキーワードは「こころの窓」

講師の永坂美晴さんは、支援員による個別支援の段階を2つに分けました。

一つは「人を多角的に見る16の視点」です。この作業は当事者の思いや状況を整理・集約し、関係機関や専門家に直接伝えることです。これは、課題を検討し、解決に向けてともに力を合わせることとなります。紙面では、編集部が9つにまとめたものを掲載します。

もう一つは「人を支える6つのポイント」の提示です。これは支援者がひとりで抱え込んで悩んだり、既存のサービスにつなぐことだけを考えるのではなく、当事者自らの力を引き出そうと試みるものです。これらによって、課題を抱えた当事者をより具体的に早く、専門家につなぐことができます。

今回の  
キーワード

# 見えない気持ちを さぐる ポイント

## 7 人はそれぞれ違います

- 本人の価値観、人生のゴール、思考のパターンはどのようなものですか。

★人は同じ問題にぶつかっても、そこをどう切り抜けるか一人ひとり違いがあります。最も大切な、本人が価値を置いている生き方を満たすことが重要です。

## 8 過去の出来ごとに目を向けよう

- 家族や友人など過去にどのような人が関わっていましたか。
- 本人が大切にしていることは何ですか。
- 過去と現在でなにか変わったことはありますか。

★過去の出来ごとが現在に大きく関連していることがあります。個人を理解するためには、その人の過去とも向き合うことが大切です。

## 9 問題に関係する人を考えてみよう

- 問題を起こしている人はだれですか。
- 問題が起こることで不利益を被る人は誰ですか。

★問題はどのような状況の変化につながりますか。問題発生の原因を考えることにもつながります。

## 4 本人の望みはなんでしょう？

- 本人のどのような悩みが満たされないために、この問題が起こっているのでしょうか。

もし本人の望みがわかりにくいときは、「もしも状況を変えることができたなら、どのように変えたいですか？」と問いかけてみましょう。

★同じような出来ごとであっても、人によりとらえ方が違います。

## 5 本人の可能性を引き出そう

- 本人の長所は何ですか。
- 本人の能力は何ですか。

★今、表面に現れている姿だけで「問題のある人」と見てしまうのではなく、本人のもつ、いまは見えにくくなっているかもしれない、長所や能力を活かすことに目を向けてみましょう。

## 6 多くの資源に目を向けよう

- 本人にどのような問題が降りかかっていますか。
- 問題を解決するためには、どんな方法がありますか。
- 問題を解決するための協力者には、どんな人がいますか。

★既存のもの（医療、ホームヘルパー、行政、システム等）にとられるだけではなく、今欠けている部分を補える外部の資源をエコマップ※に書いてみましょう。支援の可能性は一つだけではないはずですよ。

福祉用語 ※エコマップとは、外部資源や関係者・関係団体を図に表したものです。

## 1 今、本人は、なにで一番困っていますか？

- 本人の様子から思い当たるものはありますか。
- 本人の発した言葉にSOSのサインが含まれていませんか。
- 家族や近所の人たちからの情報のなかに、鍵になる言葉はありませんでしたか。

★本人や周りにいる人たちのちょっとした言葉や行動から、私たちが見落としていた本人の苦しい思いに気づけるかもしれません。

## 2 現在の状態や経過をよく知ろう

- 状態の変化はどのようなことが原因だったのでしょうか。
- その状態はどのくらいの期間続いていますか。
- いつ・どんなことで・どのくらいの頻度で症状が出るのでしょうか。
- 本人やその周りの人たちにどんな影響がありましたか。

★本人の状態をよく知ることから支援は始まります。

## 3 みんなの気持ちを整理しよう

- 本人は、自身の今の状況について、どのように感じていますか。
- 家族や周りの人たちは、どのようなことを考え、どんな行動をとっていますか。
- あなた自身はご本人の状況をどう考えていますか。
- 本人やその周りの人たちにどんな影響がありましたか。

★本人の思いと周りの思いを照らし合わせることで、なにが必要かが見えてきます。

花子さんの事例を以下の項目に当てはめて考えてみましょう。全部の項目に当てはめられなくともいいですよ。思いつくものについて考えてみましょう。そしてあなたが実際に活動をするなかで、同じような場面に遭遇したとき、この項目を思い出してみてください。

## 専門家が話す★支援のツボ

### 心的心声を聴き取ろう

永坂 美晴 さん

(兵庫県・明石市望海在宅介護支援センター長)

花子さんのように認知症が出てくると、本人の残された豊かな感情も感性も認知症の陰に隠れてしまいます。そばにいてそっと寄り添い、小さなつづやきや穏やかな目の動きなどを観察できるのも見守り支援員だからこそできること。でも、そのことが一番大切なことであり、だれでもできることではないのです。

その人のやさしさや、苦しさ、強さをくみ取れたなら、支援の大半はできているに近いのです。そのことを、花子さんに代わって関係機関や上司に伝えていくのが私たちの務めではないでしょうか。うまくしゃべられない花子さんの代わりに受け手の私たちも心を研ぎ澄まして、心的心声を聴けるようになりたいものです。

# 全国に避難する被災者への支援[2]

大阪府  
豊中市



## ◎ 地元ぐるみで組織的に被災者の暮らしを支える 大阪府豊中市

### 地元の校区福祉委員会が支援

東日本大震災の発生翌日に、大阪府の豊中市社会福祉協議会は、災害支援対策本部を設置し、街頭募金や物資の募集、被災地への職員派遣などを行ってきた。

2011年3月29日より、豊中市の市営住宅に被災者の受け入れ支援を開始した。阪神・淡路大震災では、避難所、仮設住宅、復興住宅と住まいを移すたびに孤立した人がいたことを教訓に、「豊中では絶対に孤立させない」という思いをもって支援を展開している。

豊中市に避難し、市営住宅のカギを渡す際に、市社協より支援の同意書を作成し、本人の了解を得たうえで、地元の校区福祉委員会が生活にすぐに必要となるものを集めて届ける。そうした近所の顔つなぎを行ってきた。

### 集いの場と個別支援の両輪

6月から避難者の交流会を開催する一方、豊中市役所、校区福祉委員会などと被災地のNPOが共同で「東日本大震災復興支援豊中プロジェクト」を実施し、集いの場づくりと個別支援の両輪のサポー

トを組織的に開始した。

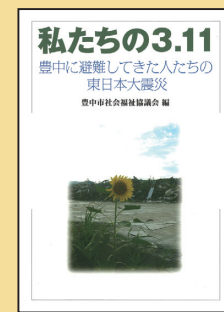
避難してきた人それぞれも状況や地域が違うため、生活相談や就労相談、住宅相談、保育所入所相談のほかに生きがいづくりの支援も行っている。息子家族とともに豊中市に避難している女性は、以前、農作業が生きがいだったが、避難してきた豊中では農作業の機会がなく、道端の草を抜いたりしながらわずかな土を触る日々だった。豊中市社協が市の農業委員会にかけあい、空いている畑を使わせてもらうこと、また、豊中市のひきこもりの人たちへの農作業指導もこの女性にお願いすることになった。避難してから気のめいることの続いていたこの女性に笑顔が戻ったという。

### 防災意識を高める

第6回の交流会では、「避難者と呼ばれ続け、物をもらうなど支援を受け続けるのもつらい」といった声を受けて、豊中ボランティアフェスティバルで手づくりの豚汁をふるまった。調理段階から会話もはずみ、子どもたちもすっかり仲良しに。売上金は全額支援金として送金した。

7月より豊中に避難してきた被災者インタビューを行い、2011年12月に手記『私たちの3.11』を出版した。震災の体験を初めて語る人もあり、話をするなかで初めて涙が流せたという人、話すことで気持ちの整理がつけられたという人など、聞き取りの重要性を垣間見た。

11月には豊中市内の小規模多機能居宅介護事業所で、施設と地域連携による合同避難訓練を実施した。この避難訓練の様子を記録DVDと訓練解説集にまとめて、2012年2月より市内7か所の地域福祉ネットワーク会議でDVDの鑑賞会を開いた。職員だけでなく市民にも防災意識を高めるとともに、自分たちのまち、地域でどのように防災を考えるかという啓発活動にもなっている。



「私たちの3.11  
豊中に避難してきた人たちの東日本大震災」  
税込 800円  
※ご購入はCLCまで  
TEL022-727-8730



2011年10月より、

夫を残して2歳の女の子と岩手県盛岡市から自主避難。原発に関連した直接的な被災者でないため、交流会への参加にためらいがあります。実家が群馬県で、以前暮らしていた東京の友人からも「どうして東京に来ないの?」と聞かれますが、自分にとって子どものために安心できる場所が関西でした。食品を安心して食べられる、そして本来自分たち家族にとって住むべきところで一緒に住みたい、それが願いです。

2011年4月、妊娠中に福島県大熊町から豊中市に避難。インターネットで東日本大震災の被災地域から避難してきている人を受け入れている産婦人科を探して出産しました。その後、住民票を移していなかったために、子どもの定期検診や予防接種のお知らせが自治体から届かず、市社協から市の保健師につないでもらいました。避難者交流会などに興味があり、地元に残る東京電力社員の夫は「なにを言われてもいいから行っていいよ」と言ってくれますが、なんとなく足が向きません。福島に帰るかどうか、まだ決めかねていますが、ただ、家族そろって暮らしたい、その思いだけは揺らぎません。

避難してきた人から一言

宮城県サポートセンター支援事務所  
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4  
宮城県社会福祉会館3階  
TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

「サポートセンター行脚～東松島市～」  
宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

今回、宮城県東松島市で市社会福祉協議会が運営するサポートセンターと密に連携し、要援護者の生活課題の解決に力を発揮している地域包括支援センターを紹介する。

東松島市地域包括支援センターは女性で構成され、M所長自らが先頭に立って、風穴を開けている。チョットそばによると火傷するのでは、と思えるほどの所長の熱い思い。コミュニティワーカーのように被災者支援にあたるスタッフたちと、復興に向けての地域再生について熱く語り合っている。被災者支援活動がこれからの東松島の地域福祉計画に活かされるよう訴える社協の常務と、役者がそろっている（その強いリーダーシップは、昔の東映映画、任侠路線に出てくる親分のように私は勝手に思っています。常務、すみません）。

先日、サポセンの地域支援の一環で、生活不活発病予防の第一人者の大川弥生先生に東松島市に出向いていただいた。

市の状況説明の折、仮設住宅の近くに畑を借り、被災者が日々の生活の励みとしている取り組みについて報告すると、大川先生から「これこそが生活不活発病予防の基本的なこと」と言われて戸惑う地域包括支援センターの皆さんの顔が印象に残っている。特別なことをしている気持ちはなかったため、思いがけずほめられたことに驚いていた。平時の地域福祉活動のなかで自然に培われてきた視点が、ここにはしっかりと根付いている（ほめすぎか?）。

辛口でとどまっている大川先生に、初めはおよび腰だったM所長が、会議途中から、大川先生へ質問詰めに転じた様子は、予想した以上だった。私は、大川先生とM所長のやり取りをエンドレスで聞き入ってみたい、と少し思った。だけど、長時間では私の身がもたないと思直した。

◎宮城県被災者支援従事者研修  
ステップアップⅡ研修

基礎研修後、6か月程度の経験のある支援員が対象の研修会です。

- ①【仙台会場】 1月17日（木）・18日（金） 戦災復興記念館4F第2会議室
- ②【石巻会場①】 2月5日（火）・6日（水）石巻市ささえあい総括センター
- ③【気仙沼会場】 2月26日（火）・27日（水）気仙沼保健事務所

MESSAGE

サポーターのあなたへ！

支援員からの相談に  
浜上さんがお答えします。

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章



Q 仮設住宅を退去する人がこれから増えていきます。出て行かれる人への支援、残る人への支援をどうすればよいのでしょうか？（支援者からの相談）



A 時間の経過とともに、仮設住宅から自主再建して出て行かれる人、復興公営住宅の建設とともに出て行かれる人が増えてきます。その新しい土地や住まいになかなかなじみず孤立する人もいます。特に、高齢者や生きづらさを抱えた人の場合、仮設住宅でせっかく培われた人とのつながりが切れるため、気力も低下し、新たにつながりをつくっていくことは大変なことです。

困ったときやさみしいときに連絡がとれるように、仮設住宅を出る前に、サポートセンターの電話番号を伝えるとともに、転出先の住所や電話番号などを聞いておき、必要に応じて転出先の民生委員・児童委員やサポートセンターへつなぐことも大切です。

仮設住宅に残る人への支援において、高齢者や低所得世帯では、さみしさや経済的な理由などにより復興公営住宅

への転居を決断できず、不安を募らせながら仮設住宅での生活が長引くことがあります。その際、取り残され感や先行きの生活への不安を抱え、精神的に落ち込む人も出てきます。阪神・淡路大震災時、ある地域では、訪問頻度を多くしたり、同じような人が集まれる気軽なお茶会や食事会などを行い、思いを分かち合いました。また、一人ひとりが抱えている不安や生活課題を受け止め、援助しました。そのような支援が東北でも求められてくると思います。

【プロフィール】 鳥取県生まれ。兵庫県川西市、兵庫県と大阪府の社会福祉協議会で地域福祉活動の推進や個別支援に携わる。気仙沼市社協災害ボランティアセンターの支援に関わったことが縁で、2012年4月より宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザーとしてサポーターの研修等支援にあたっている。



大和田信さん(左)と船田勤さん



黒ニンニク

4回目

市民リレー

# 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

## 大和田信さん

◎福島県会津美里町



福島県  
会津美里町

「自分で動き出さなくちゃなにも始まらない。とにかく仕事をしようと思っただけです」と話す大和田信さん。生まれ育った福島県楢葉町は、東日本大震災により原発避難区域となり、避難してきた福島県会津美里町で黒ニンニクづくりを始めた。震災前は兼業農家だった大和田さん。会津美里町の農家から紹介を受け、無償で畑を貸してもらったことができた。気候条件などを考え、黒ニンニクをつくらうと思いついたものの、一つ問題が。地元住民たちから、会津美里町ではあまり黒ニンニクを食べないという話を聞いたのだ。「会津美里町の文化を変えないようにしたい」という思いがあった。ただ、ここは雪が多いから風邪予防のためにも黒ニンニクはいい。手軽に食べられる黒ニンニクだったら、と思ったんです。通常の白いニンニクより、甘みがあり、独特の強い香りも抑えられている黒ニンニクは、地元の人たちにも好まれるだろうと考えた。

地域でつくるのなら、多少でも自分以外の人の力にもなれば、と思っただけの矢先、就労継続支援B型の共同作業所「希来里」の所長、船田勤さんと出会った。懸命に活動する障がい者たちのことを知り、一緒に黒ニンニクをつくることを決めた。「うちも初めてのことでだし、みんなも興味があるようです」と、船田さん。丹精に育てた黒ニンニクは、町内の直売所や仮設商店街で販売されており、会津美里町の住民たちからも「甘くて食べやすい」と好評だ。2012年6月には、会津美里町の伝統野菜に登録された。「将来、楢葉町の再生のために活動していきたい」と、大和田さんは次のステップへの意気込みを語る。

### 福祉用語

※就労継続支援B型事業所…障がい者自立支援法に基づき就労継続支援のための施設。一般企業への就職が困難な障がい者に就労機会を提供するとともに、生産活動を目的とした事業所。

## 購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか? お知り合いの方へのプレゼントにもご利用ください。

●購読会員 年3,600円(年12回、送料込み)

●支援会員 1口3,600円(年12回、送料込み)

ご指定いただいた先へ、それぞれ年12回お送りします。指定がない場合は、編集部が選定する被災都道府県・市町村の被災者の生活支援担当課、または社会福祉協議会のほか、全国に避難する被災者を支援する都道府県、市町村の被災者の生活支援または社会福祉協議会に送付いたします。

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

＜お振込先＞ ●ゆうちょ銀行振替口座  
口座番号：02260-9-46303  
加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、①お届け先の住所と②何号からの購読申込みか、支援会員の方は③希望する送付先のあて名、または④「指定なし」と記入してください。

## ☆次号予告 特集「暮らしを支えるアドバイザー」

### 読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。みなさまからの率直なご意見が本紙を大きく育てます。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

あわせて、お助めの取材先などの情報もお寄せください。うちに取材に来てほしい!という方もぜひ!

3号を読んで...

●他県の情報を知る機会が少なかったので、この情報紙をいただけてよかったです。(福島県Tさん)

本誌1号の16頁で紹介した赤石貞子さんは「元民生委員」でした。訂正いたします。

### 編集後記

☆自分ひとりのこれからの考えるだけでも正直大変なときがあります。けれど、取材先のみなさんが仲間内だけではなく、地域全体の未来を考え、奮闘している姿に胸を打たれました。(菅原)

バックナンバーがホームページで読めます!  
[http://www.clc-japan.com/sasaeai\\_j/](http://www.clc-japan.com/sasaeai_j/)